

東ドイツの初等科学教育

—「郷土科」を中心として—

柴 一 実
(広島大学大学院)

I はじめに

東ドイツにおける初等科学教育は、戦後、国家体制の変遷に伴い、戦前のものとは質的に大きく変わって来ている。しかし、伝統的な合科教授と「郷土科」(Heimatkunde)の原理は、依然として引継がれているように見える。それゆえ、それらドイツ固有の原理・原則が、どのように社会主義教育の中で、新たに位置づけられ、教授・学習されているかを明らかにすることは、東ドイツの初等科学教育を論ずる際に不可欠である。従って、本稿では、ドイツ固有の教科であり、また、教授原理である「郷土科」を中心として、東ドイツの初等科学教育の特色とその問題点を考察する。

II 「郷土科」の変遷とその教育的理念

戦後、東ドイツにおいて、「郷土科」は、1955年に教科として導入されたが、1959年3月、ドイツ中央教育研究所から出された「十年制一般陶冶総合技術学校の学習指導要領のための基本構想案」において、教科としては解消され、教授原理としての側面が強調された。その結果、1959年、1966年の教育課程において、以前の「郷土科」の内容は、国語の中の正書法、文法などと並ぶ一科目として存在し、「郷土科的直観」(Heimatkundliche Anschauung)と呼ばれたが、1967年から始まった現行の教育課程において、その科目名は、再び、「郷土科的直観」から「郷土科」(Heimatkunde)へと改められている。また、それぞれの教科目の週時間数、授業内容は文部省によって決められており、現在、初等科学教育は、国語の中の一科目としての「郷土科」の中で、主に教授・学習されている。

さて、現在は教育科学アカデミーの会員である EDGAR DREFENSTEDT は、1959年、雑誌「Die Unterstufe」の中で従来の郷土科教授を次の2点に涉って批判している。

- (1) 我々は、郷土科教授の中へ新しい内容を持ち込むことによって、市民的郷土概念の古い要素を保持したり、意識して克服しなかったり、或いは、

社会主義的郷土概念の新しい要素によって置き換えようと努めた。

- (2) 我々は、郷土科の内容の問題を全体的な低学年教授の枠内で新しく定める代わりに、「郷土科」という教科の古くから「試みられ、確認された」形態にあまりに固執していた。(①、4)

さらに、彼は、「我々が生活している郷土は、社会主義的生産基盤に立脚した郷土である」という認識に基づいて、郷土科教授の際に明らかにしなければならない概念を、(1)郷土、(2)郷土愛、(3)郷土科、であると指摘し、従来の郷土科概念を批判し、自分達の新しい郷土の理解を強調している。その上で、彼は、郷土原理を低学年全体の教授原理として維持しようと主張している。

次に、国語教授と新しい科目としての「郷土科的直観」に関して、当時、ドイツ中央教育研究所の教科部門の指導者であった WERNER HAGEMANN は、1960年7月15日、文部省によって開催された会議において、次の2点に涉って報告している。まず第一に、「郷土科的国語教授」(Heimatkundlicher Deutschunterricht)に関して次のように述べている。「言語の熟達は、児童が自然や社会の現象、因果関係の中へより深く入り込むことを可能にするので、児童にとって郷土科的环境の中での観察、経験は、母国語理解のための補助である。」(②、3~4)第二に、科目としての「郷土科的直観」に関して次のように述べている。「『郷土科的直観』の時間の中で、児童は、従来可能であったよりも社会的実践とのより緊密な接触の中で、自然や人間生活に関するより基礎的な知識を得るべきである。観察、探索、授業活動、小実験、社会的に有益な活動のように、多数の学習の実践的な形態の適用によって、児童は、より包括的に陶冶され、自分達の肉体的、精神的な力の啓発のためのより大きな可能性を得るべきである。」(②、4)

彼等の主張に代表される郷土科教授のための議論は、1950年から1960年頃にかけて最も活発に行なわれ

ていたように見える。

■ 「郷土科」の課題、内容、方法

さて、現行の Lehrplan には、初等教育段階全体における「郷土科」の一般的陶冶・訓育目標が挙げられている。その中で、第1学年から第4学年までの理科的内容に関する陶冶・訓育目標は、

- (1) 自然に関する基礎的知識を媒介すること
- (2) 観察、実験の際に精神的能力の発達を計ること
- (3) 簡単な自然に関する因果関係への洞察を準備すること
- (4) 自然はすべての人間の幸福のために変えられようという確信を準備すること
- (5) 自然に対する愛情を深め、自然保護の態度を養なうこと (③, 316, 321)

という5項目に要約することができる。

こうした課題を踏まえて、現行の Lehrplan の中で取り上げられている具体的な理科的内容は、第1学年から第4学年まで、「自然に関する知識—自然観察」というテーマの中で一貫して教授・学習されている。その内容は次の通りである。

第1学年 (④, 92)

冬の自然観察・気象観察、春の自然観察—いくつかの早咲きの花についての学習、春の鳥の保護

第2学年 (⑤, 74)

気象観察、秋の広葉樹・針葉樹における変化、秋と冬の動物、春における植物の変化、春の動物

第3学年 (⑥, 87)

気象と気象観察、われわれの郷土の動物、われわれの郷土の樹木、われわれの郷土のさらに拡大された植物、花から実へ、穀物、病気の予防について

第4学年 (③, 318)

水の状態変化、水の循環、われわれの郷土の動物と植物、生物と生物の環境、人間の健康な生活態度に関する知識

このように、「郷土科」の理科的内容は、

- (1) 郷土の植物界・動物界の季節的变化に基づいて、第1学年から第4学年まで相互関連を持った生物学的内容
- (2) 気象観察に基づいて、第1学年から第3学年まで相互関連を持った内容と、第4学年の「水の循環」とを含めた気象学的内容
- (3) 第4学年における実験室で児童自身の行なう実験を含んだ物理・化学的内容
- (4) 第3, 4学年における保護衛生に関する内容などから構成されており、郷土性、季節性などを重視した系統的な内容が多いように見える。

また、教授方法は、基本的には児童の直観性、自己活動の原理などを重視しつつも、その具体的な方法は、遠足、小旅行、授業時間中の実験・観察、長期にわたる実験・観察、収集と探索、教科書の利用、直観教具としてのフィルム・写真の利用など多種多様である。

IV おわりに

東ドイツにおいて、「郷土科」を中心とした初等科学教育は、内容的には、児童の身のまわりの生活圏からその教材内容を求めているものの、生物学的、及び、気象学的知識内容においてはそれらの系統性・科学性が考慮されているし、方法的にも、その具体的な形態は多種多様である。従って、そうした点からも、現在、東ドイツにおいては、新しい「郷土科」の原理、知識内容の系統性・科学性を取り入れた新しい具体的実践の様相を示した合科教授がようやく確立されて来ているように思われる。また、東ドイツにおいて、初等科学教育は、自然科学教育全体の中に位置づけられており、単に中等教育段階における科学教育の「下請け」的存在ではないように思われる。そうした方針は、子どもの心理的、教育的要請を考慮した東ドイツ流の初等科学教育の一つのあり方であり、漸進的であるが着実な行き方であると言える。それゆえ、物理・化学的内容において、初等教育段階と中等教育段階との関連性が十分でないという批判は的を得ていないかもしれない。東ドイツにおける初等科学教育は、以上のようなことから、「初等科学教育は如何にあるべきなのか」という問いに、改めて示唆を与えてくれるように思われる。

引用文献

- (1) Edgar Drefenstedt: Heimat —Heimatliebe —Heimatkunde, Die Unterstufe, Heft 6, 1959.
- (2) Redaktionskollegium: Probleme der heimatkundlichen Bildung und Erziehung in der Unterstufe, Die Unterstufe, Heft 9, 1960.
- (3) Gerhart Neuner: Allgemeinbildung. Lehrplanwerk.Unterricht, V. und W.V.V., 1972.
- (4) Ministerium für Volksbildung: Lehrpläne Klasse 1, V. und W.V.V., 1973.
- (5) Ministerium für Volksbildung: Lehrpläne Deutsch und Mathematik Klasse 2, V. und W.V.V., 1973.
- (6) Ministerium für Volksbildung: Lehrpläne Deutsch und Mathematik Klasse 3, V. und W.V.V., 1973.